LIVE「3」

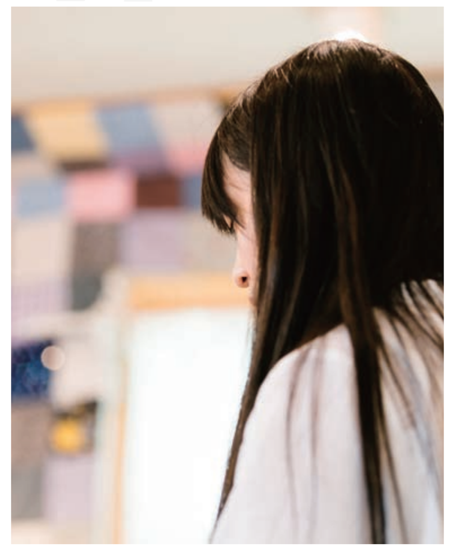
Solo Tour

SUPPORT ACT

ライブを彩る若きアーティストたち この日のために作成した自作品で登場。

3 / 25 (SAT) 柏 Nardis

千葉県柏市柏3-2-6　Ksビル1F



後 奈津美
1999年生まれ。茨城県立牛久栄進高等学校2年。舞台への強い思いがあり、音楽と演劇、二足の草鞋をはいている。ユニークな発想と躍動感のあるリズムが彼女のスタイルを形作ってきた。何事にも全力で取り組む努力家であり、人を和ませる事の出来る愛すべきキャラクターの持ち主。

風間 優希
2000年生まれ。新潟市立高志中等教育学校4年。電子オルガンからスタートし、中学より作曲とピアノを始める。リズムを伴ったポップなメロディを作る事に長け、ロックやジャズを取り入れた作風は徐々に幅を広げ始めている。深まる音楽への関心と共に、宇宙関連の仕事にも興味を持つ。

1994年から20数年続くこのJazz Barは地元の方々にも愛され、数々上質な音楽を届けてきた。売りはなんと言ってもピアノとマスターの人柄だろう。このお店から育ったミュージシャンも少なくない。
ピアノは操作性に優れ、低音から高音までの粒立ちが素晴らしい。ミュージシャンの意向も受け、様々工夫をされたとも聞く。閃きに対してのリアクションに優れたピアノであり、弾いているとどんどん頭が冴え渡ってくるような感覚がある。
至近距離で見聴きできる臨場感は他では得がたいものだ。ビールにウィスキー、カクテルを傾けながら、自分自身が弾いているかのような感覚を味わうのも楽しいかもしれない。
ところでNARDISと聞いてビル・エバンスの録音を連想する方も多いと思うが、実はNARDISはマイルス・デイヴィスの作曲だったと言われている。そして、曲名の意味と由来はよくわかっていない。

3 / 26 (SUN) 館林 L' AUTRE MAISON 西の洞

群馬県館林市大手町6-41

和久井 沙良
1998年生まれ。東京藝術大学音楽学部楽理科1年。常に率直で自然体の表現が魅力。音楽と言葉の中には時折、思索的な部分も見受けられる。やや天然だが、友人や周囲の人を大切にする優しい心の持ち主でもある。
物怖じしない性格で即興演奏にも特筆すべきものがある。

佐野 幹仁
1996年生まれ。東京藝術大学音楽学部器楽科打楽器専攻1年。繊細な音から力強い音まで多彩な表現が可能で、音楽全体をまとめる力に優れている。控えめに見えるが状況判断が良く、ステージに出ると抜群の存在感を発揮する。聴き手を笑顔にする事の出来る奏者。

レストランでありコンサートホールでもある西ノ洞は、武家屋敷の面影が残る館林のランドマーク的店舗として存在している。家族や友人で音楽と食事を気軽に楽しむ事の出来る店であると共に、ミュージシャンにとっては抜群の響きと圧迫感のない贅沢空間となっている。

大きく広がる天井、石の壁と柱にはアーティストの直筆サインが描かれ、季節を感じる事のできるテラスに屋根裏部屋のような3階ロフト席もある。
そして西ノ洞の象徴ともいえるステンドグラスは、日が傾く頃に徐々に美しく表情を変えていく。もっとも色濃く美しく映えるその時間こそが、コンサート開始の合図となる時間なのだ。

3 / 28 (TU) 東京 MUSICASA

東京都渋谷区西原3-33-1

室元 拓人
1997年生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科1年。生まれながらに歌うようなピアノに才があり、真摯な姿勢は見るものの心をうつ。16歳で自作自演のコンサート「Ayatori」を開催し、賞賛を博した。叙情的な作品、劇的な作品に特別な強みを発揮し、現代のコンポーザー・ヴィルトゥオーゾへの道を歩み始めた所である。

栗城 典子 (共演)
1997年生まれ。東京藝術大学音楽学部器楽科ファゴット専攻1年。穏やかな佇まい、透明感のある伸びやかな音色が聴く人を惹きつける。

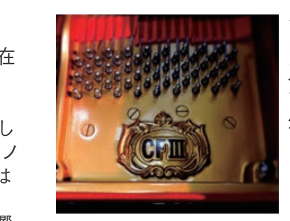
代々木上原の高台にある音楽専用の小ホール。
MUSICASAとは、イタリア語で音楽の家を意味する。
100名収容のホールは2階バルコニー席と中2階席も存在し席選びの楽しみも尽きない。

20代で最初にFabricという名のデュオでライブを企画した場所がMUSICASAだった。当時まだ艶々だったピアノはよく慣らされ、熟成の度合いを深めている。ここには良い音楽をするために必要なものが全てそろっている。
ピアノは言うまでもなく永田音響設計によるホールの響き、スッキリとした設備とスタッフの方の親切な対応、閑静な佇まいに相応しい周辺環境も落ち着きと安らぎを与えてくれる。
公演と共にその日をまち歩きにあてて過ごす事もお薦めしたい。1999年ハンブルグ製のSteinway B-211と1982年製のBösendorfer model200の2台を完備しており、何れのピアノを選択するかは演者にとっての楽しみである。と共に究極の悩みともなっている。

3 / 30 (THU) 新潟 SpaceY

新潟県新潟市中央区東万代町1-30

山崎 純太
2005年生まれ。新潟市立白山小学校6年。曲作りに自分の流儀がある。音遊びから始まるような作品は、パズルかドミノを追いかけるようなスリルを伴う。骨折をしながらも4本指で演奏する意志の強さと、一つ事を決めて進める時の高い集中力を持っている。



1976年に大商業地区である万代シティに開設したヤマハ新潟店は、2011年8月にヤマハミュージック新潟店として駅前に店舗及び新センター「ミュージックアベニュー」を移転。およそ140名が収容できるスペースYは、コンサートをはじめ発表会や公開講座などに幅広く使用されている。設置されているフルコンサートグランドのCFⅢはコンディションが良く、音域ごとのグラデーションが美しい。即ち、演奏者の力量を如実に反映する最も端正で癖の少ないピアノと言ってよいだろう。

“The Rainbow”

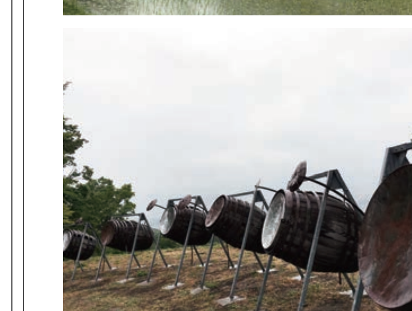
My heart leaps up when I behold
A rainbow in the sky.
So was it when my life began;
So is it now I am a man;
So be it when I grow old,
Or let me die!
The Child is father of the Man;
And I could wish my days to be
Bound each to each by natural piety.

-William Wordsworth

4 / 2 (SUN) 上田 信州国際音楽村 こだまホール

長野県上田市生田2937-1

小野　大治郎
2002年生まれ。東村山第一中学校2年。第18回ペトロフ・ピアノコンクール第一位
第28回全日本ジュニアクラシック音楽コンクール作曲部門 第一位
ポーカーフェイスな気質で、無駄の少ない語り口と洗練された音運びが特徴。卓越した演奏技術を持ち合わせ、古典やバロックでの音運びには知性が感じられる。
音楽プロデューサーを目指している。



2017年で30周年を迎える信州国際音楽村は、3つの大きな施設とそれを取り囲む大自然の中に存在している。
建物の1つは研修センターであり、もう1つはダイナミックな眺望を背景にたたずむパノラマステージひびき（野外ステージで千名を収容可能）、そしてもう1つが今回のライブの舞台となるホールこだまである。
カラマツの集成材を骨組みに使用した木造りのホールからは、時間を忘れさせる温かみと自然の広がりを感じる事が出来る。

初めて訪れたのは7、8年前の事だった。以来、いつかこの場所で音を奏でてみたいと思っていた。当時は存在していなかったピアノも1台増え、今はスタインウェイD型コンサートグランドが2台置いてある。
舞台上と舞台袖とにある2台を弾き比べたり、当時の事など思い浮かべながら、どちらを使用するかを考えた。初めて上田の地を訪れてから、この数年で馴染みの店や友も出来た。今度はそこに誰かを連れていきたいと思うようになった。
この地をライブツァーの最後の場所に選んだ理由はもう一つある。
信州国際音楽村は「子供たちが素晴らしい自然環境の中で人間性を豊かにする地域作りを目標として」存在をしているのだ。

RYOTA HIRAMATSU

BIOGRAPHY

作曲家、ピアノ奏者。東京音楽大学作曲科卒業。
在学中から映画やディナーショウ、打楽器アンサンブルの委嘱作品などを手がけ、作品は多岐に渡っている。これまで橋本和昌、徳澤青弦、高遠彩子、五十嵐あさか、奥田亮との共演・音楽製作があり、SMOOTH ACEのアルバムにはピアニストとしても参加している。

2011年、深山×平松「6月8日」をリリース。2012年3月、ダンサー丹羽洋子との公演(S)HEを主催。10月、Canon「PowerShot S110」CMのピアノ演奏。
2013年に入って小布施の境内アート、気仙沼のTシャツアートで、画家の越ちひろとライブペインティングを行う。6月には長野県小谷村の写真家・前田聡子と、写真と音による公演「まっすぐに。」を主催。近年は、Musica Charlandoでのライブや、詩人・ウチダゴウとの公演「一時間の詩」が好評を博している。Real&Trueの公演ではKeith Tippett、Jan Gunnar Hoff、Ulrike Haage、Christian Wallumrød Ensemble、In The Country、Splashgirl、Eple Trioのオープニング・アクトを務めた。Eric Schaeferとはインプロでのセッションも行っている。

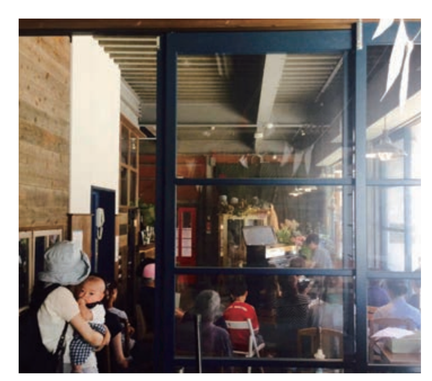
2014年、ソロアルバム「1」をリリース。4箇所でのライブツァーを敢行。2015年にリリースされた「2」は、20世紀を代表する振付師であり、シュトゥットガルト・バレエ団の芸術監督だったジョン・クランコに捧げられた。

WANDERLUST

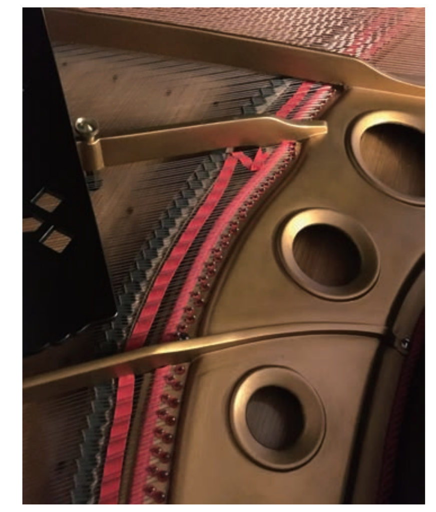
長野市の街中、善光寺門前に新小路というエリアがある。この場所は「もんぜんまち」とも呼ばれ独自の発展を遂げてきた。古きを大切にし生かすことに長けたまち。そう表現される事もある。その一角、表参道を折れた裏通りにWANDERLUSTはある。
ガラス建具には文字や絵が描きつけられ、玄関口からは色彩豊かな花々がみえる。
フローリストとスケッチジャーナリストの2人がシェアしているこの空間にピアノが入ったのは2016年の5月の事だった。
このピアノは解体が決まっていた由緒ある信州会館から運び出された古いアップライトのタイプのものである。ピアノを洋館から救い出した青年とWANDERLUSTをシェアする2人、そしてほぼ通りすがりである平松の4人でご近所の「ぴあの工房」に補修を依頼。晴れてお披露目の運びとなった。奇しくもその日は七夕の日だった。願いごとが書かれた短冊が風に揺れる中、日中はご近所の方が家族を伴い音楽に耳を傾け、夜は斜め向かいのRoger a tableの料理に舌鼓をうちながら皆さん思い思いの時間を過ごしていた。

WANDER PIANOと名付けられたこのピアノは搬入以来、様々な表情を見せている。朝に乾いた風に乗って軽やかに窓から吹き抜けていったかと思えば、夕暮れには落ち着いた表情でしっとりと寄り添う。季節の温度や湿度、訪れる人にも影響されて生き物のように姿を変える。路地の空気を感じながら奏でるのは、ホールやライブハウスで演奏するのとは一味違う味わいがある。

WANDERLUSTに一日いるとポツポツと良いタイミングで人が訪れて、会話したり何かを一緒に見たり、という時間が自然に生まれる。そんな風通しの良さがあって、花と絵の空間に音も入りこむことが出来たのかもしれない。この場所は自分に正直に生きている人がとてもよく似合う。WANDERLUSTとピアノの物語はまだ始まったばかりだ。

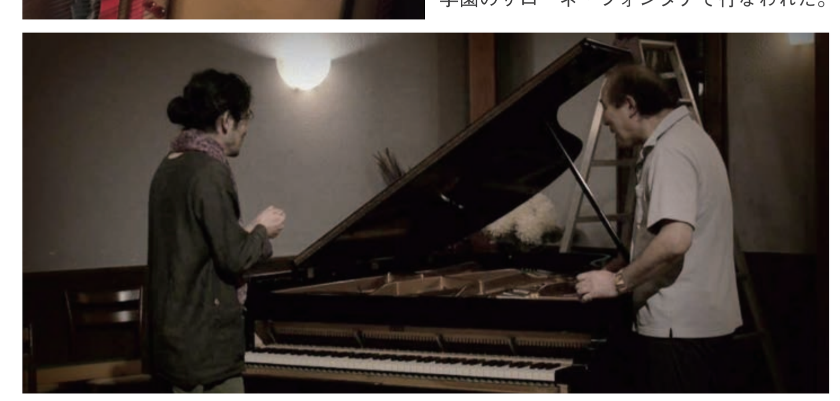


STEINBERG



スタインベルクはドイツ＝ベルリンで1908年に創業したメーカーで、ベルリンフィルにもコンサートピアノとして使用された銘器と言われている。（ヴィルヘルム・スタインベルクとは異なる）
しかし、1929年の世界大恐慌とその後の第二次世界大戦の影響により生産が途絶えてしまう。製作に携わった技術者は国外へ拠点を移すなどして当時の資料は殆どが消失。わずか32年あまりの歴史で幕を閉じたスタインベルクは現在、日本国内では昭和天皇の即位記念として寄贈されたものを含め、わずか数台が確認されるのみとなっている。このピアノを、VSP音楽企画の代表であり調律師でもある村田勝美さんの協力により、新作のレコーディングで使用させていただく事になった。村田さんとのそもその出会いは2015年の秋に溯る。成城学園のサローネ・フォンタナで行なわれた。

公演の前夜、調律師として来ていた村田さんと、会場に設置されたベーゼンドルファーの印象について30分ほど会話をする機会があった。それはピアノの特性を理解し、どのようにアプローチするかを考える為のセッションのような時間だった。
それから1年半が経過したある日、「珍しいピアノがあるので弾いてみませんか」というお誘いを村田さんにいただく。そうして対面したのがスタインベルクのピアノだった。初めて試弾をした時の印象は色濃く、帰宅後も体の芯に響きが残っているかのような感覚があった。一口にスタインベルクと言ってもそれぞれで個体の状態や修復過程が異なるため、一台ごとに性質は大きく違ってくる。
村田さんはレトロなものへの感傷としてでなく、生きたものとして演奏できるピアノにしたかった、とおっしゃっていた。その為、響板を残して他の部品等は響きを生かすものに変えるという工程がとられている。古いピアノと聞いて想像するアンティークな音の感触ではない。しかし、明らかに現代のピアノが持ち合わせていない志向性を持ったピアノであり、想像力をかきたてるピアノだという事は言える。レコーディングの日までテストのために毎月のように東林間に通い音の印象や操作性の事などのヒアリングを綿密に行った。そうしてスタインベルクへの理解を深めていった。
これから多くの人がこのピアノに触れていく事になるだろう。貴重な機会を得た人間の一人として、この録音が後に続く人たちの役に立つ事を願っている。
そして、スタインベルクの持っている音を多少なりとも引き出すことができたなら、これに勝る喜びはない。



RELEASE

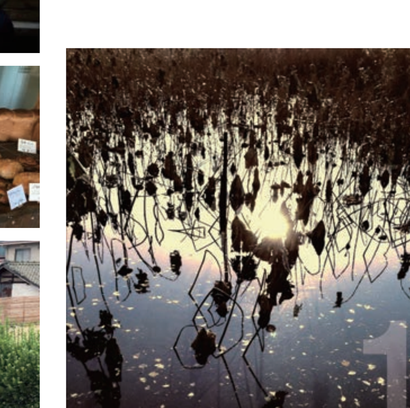
Title: 3
イギリスの詩人 William Wordsworth
"The Rainbow"のサイドストーリー
幻のピアノ、STEINBERGに感化されて

Release:March.2017

Title: 2
20世紀を代表する振付師 John Crankoへのオマージュ
3つのスタジオ、3台のピアノが描く叙情詩

Release:August 5.2015

1. Melancolia
2. Choral
3. Step by step
4. `Mirror' pas de deux
5. D-C-H (reprise)
6. 結婚式
7. July 7
8. 鶫
9. Improvisation Ⅲ
10. 抜き糸
11. パフスリーブの少女
12. 鴉
13. あなたが生まれた日
14. Melancolia(reprise)
15. Grandmother



Title: 1
宵に目覚め暁に眠る
Bösendorfer imperialとStainway D-274
2台のピアノとの対決

Release:July 4.2014

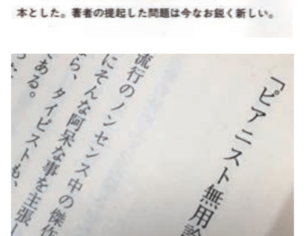
1. Improvisation
2. D-C-H
3. Sarabande
4. Toccata
5. Intermezzo Ⅱ
6. Ostinato
7. July 8
8. Ostinato(reprise)
9. M.M.=60
10. Improvisation Ⅱ
11. Air on the G#

RECOMMEND

音楽と生活 - 兼常清佐随筆集 -

1885年に山口に生まれ、音楽美学者として数々インパクトのある論文を残したカネツネキヨスケ。音楽界のタブーに切り込みを入れた著者の鋭い洞察と提起は必見。「名人滅亡」「ピアニスト無用論」等で提示した科学的な見地からの考察、ピアニストという職業に投じた一石は筆者の生きた時代ではセンセーショナルなものだったに違いなく、現代においてさえその視点は新鮮味を失っていない。
合理的かつ明瞭である事をモットーとして生きたカネツネは、民謡採譜を行う感性あふれる文化人でもあった。俳句、日本語、自然にいたるまで日本文化への考察としても今につながる興味深い一冊となっている。

岩波文庫



ELLA VALLEY / Cabernet Sauvignon 2011

イスラエル産の赤ワイン。
飯綱町のサンクゼールワイナリーにて試飲、即時ケース買い。
品のある渋みと旨みには唸るしかない。

COFFEE& ROASTER 2-3

下高井戸駅近く、ジャズと野球には目がない店主が美味しい珈琲を飲める店を出した。
こんな良い店があるなんて東京もまだまだ捨てたものじゃないと思う。店としての歴史は10年に満たないぐらいなのだが老舗のような味わいがあり、訪れるたびその味わいが増してきているように感じる。心づくしの珈琲は言うまでもなく、サイドメニューも豊富。
つかず離れずの穏やか店主の人柄とも相まって、ご近所に親しまれているのも頷けるというもの。常連さんとの会話を気さくに楽しむ事が出来るのも、このお店ならではだろう。近くの下高井戸シネマとあわせて巡るのがお薦め。

東京都杉並区下高井戸1-2-14 蒲原ビル1F
営業時間11:30〜20:00（19:30 LO）
月曜定休(月曜祝日の場合は翌火曜)
tel:03-3327-9923

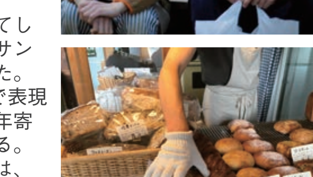
お城の坂道

駅から上田城に続く坂道の途中、3.4軒ほど並んだ店舗の一角にこのお店はある。
電車に30分ほど揺られれば別所温泉、更に南に足を伸ばせば鹿教湯温泉。季節折々の散歩に相応しい上田城の外回りをぐるっと歩いてから訪れる事をお薦めしたい。名物ソースカツ丼に米ピザは勿論、ラーメンに栄養満点の日替わり定食にと目移りは止まらないはず。とにかく元気になるご飯を食べたいならこのお店で決まり。カウンター席からは明るく茶目っ気のある店主の生き生きと動く姿が見える。ライブ感があって、見ているだけでも楽しい。新旧入り乱れる上田のまちにあってもスタンダードであり続ける、それがお城の坂道というお店なのだ。

長野県上田市大手１丁目12番23号　BIG UEDA
営業時間10:00〜17:00 (冬季は16:00まで)
木曜定休　tel:0268-27-6516

LOCALBENCH

かつてルヴァンで料理部門の担当をしていた店主が独立して開いた店がLocal benchだ。駅員もいるのかいないのかというぐらいゆったりとした時間が流れる東御の小さなまちで、このパン屋に行くだけの為に駅を降りるのは意外と幸せな時間であったりする。

つい近頃までパンというものに興味を持たずに来てしまったが、以前、店主が帰り道にもたせてくれたサンドイッチをほうばって以来、全ての価値観は覆った。信州産の小麦を使ったLocal Benchのパンを一言で表現するなら「優しいパン」だと思う。こどもからお年寄りまで食べやすいサイズとかたさに形作られている。しかし、口に入れた時の触感とそこからの広がりは、パンと聞いて想像するものを超えている。チョコやフルーツなど、季節の素材を取り入れたデニッシュ系のパンも毎日食べたくなるような味わいだ。「これまでで一番おいしかったのは母の作ってくれた料理」そう話してくれた素朴な店主の手からストイックに生み出されているパン、一度はお試しあれ。

長野県東御市滋野乙950-3
営業時間11：00〜18：00
日・月曜定休　tel:0268-62-5226